

この人に聞く

(株)ソイルテック専務取締役

大島 郁夫さん

した。九州で3人目で、県内は初。

大島さんは、高知大学文学部(現理学部)理学科(地学専攻)を卒業後、地質調査や地すべり対策工事に携わってきた。

は、特定の成因(物事ができあがる原因)によって形成された地形の種類を認定する、正確さと精度が要求され、その能力は、判読技術にとどまらず、広い知識と経験、洞察力が不可欠という。

地質調査や土質試験などを手がける(株)ソイルテック(大分市鶴崎、中元徳朗社長)の大島郁夫専務取締役が、超難関の資格検定試験「応用地形判読士」(判読士)に合格

全国地質調査業協会連合会が認定する判読士は、地形・地質に関する知識を身に付け、地形リスクを判断できる応用能力技術者。地形図や航空写真による地形判読技術



判読士の試験に合格した大島さん

判読士の資格検定制度は、24年に創設。28年までの5年間で全国から、一次試験に899人、うち二次試験には317人が受験。合格者は83人。全受験者中の合格率は9%と超難関。大島さん

難関の「地形判読士」に

県内初 災害のリスク読み解く

は、26年から3度目のチヤレンジで、晴れて登録証を手にした。

近年、全国的に集中豪雨が多発。単なる地質調査だけでは、河川や斜面の危険箇所の判断は難しい。川の流れが急に曲がっていたり、等高線の間隔が不自然な所を、航空写真を元に確認すると、過去の土石流が溜まった場所だったりする。

判読士は、現地での地質調査の前に、机上で広範囲に应用的に判読する。例えば▽地形的に見て、地すべりの末端部に位置する▽(上から見ると)その付近に直線状の段差があり、調べてみると断層の可能性が高いなど、地形図を見ながら危険性を洗い出す。

大島さんは、これだけではまだ仮説の段階だという。ピックアップされた危険箇所を現地地表踏

査で補充することが重要で、効果的な地質調査の提案が可能になるという。「地形判読の知識がないと、例えば、過去の土石流で形成された斜面上に住宅地を開発してしまっケースもあり、豪雨時に被災する危険性が高い。また、過去の大きな地すべり跡地で、やっと安定した部分を工事でカットしてしまうと、バ

ランスが崩れて地すべりの再活動を誘発する恐れもある。危険箇所を判断するのは難しく、そういう予察がないと、現地調査しても大きなリスクを見逃すことになる」と、最初の調査段階での予察が重要だと強調した。

今後、地質を含む広範な知識と経験からの、危険箇所予察やアドバイスなど、活躍の場が広がりそうだ。

(吉野)